

要 旨

本研究は、生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てるために、学習と生活の場面を結び付ける手立てを取り入れた学習指導の在り方を探ったものである。日常生活で使用する物を教材にして実習等の体験活動を取り入れること、生活の場面と結び付ける学習活動を設定すること、題材の最後に振り返り活動を行うこと、この3つに重点を置いた。これらの手立てをとることで、児童は学習と生活の場面を結び付けて考えられるようになりつつある。また、暖かい着方に対する意識の変容が見られ、学習したことを生活に生かそうとする実践的な態度が育ってきている。

〈キーワード〉 ①日常生活で使用する物 ②生活の場面と結び付ける学習活動 ③振り返り活動

1 研究の目標

生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てるために、快適な衣服と住まいの内容において、活用につながる基礎的・基本的な知識及び技能を習得させる指導の在り方を探る。

2 目標設定の趣旨

小学校家庭科では、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるだけでなく、現実の自分の生活の中から課題を見だし、身に付けた知識や技能を活用して生活をよりよくしようと工夫する能力と進んで実践しようとする態度を育てることが求められている。基礎的・基本的な知識及び技能は、日常生活に関連のある学習場面において、児童自身が主体的にそれらを生かし、自分の考えを働かせながら工夫する経験を重ねることで身に付いていくものと思われる。

平成 22 年 2 月実施の児童の家庭科学習及び家庭生活に関する調査によると、89.5%の児童が家庭科を「好き」と答えており、楽しいと感じている児童も多かった。一方で、「好きではない」と答えた児童は「製作するのが苦手」、「ミシンの使い方が分からない」など、技能について苦手意識をもっていた。また、「学習した内容を家庭で実践したことがあるか」については 91.2%と、高い割合で実践していることが分かった。しかし、「布で生活に役立つものを作る」ことは 38.3%、「衣服の着方を工夫する」ことは 34.6%と低かった。苦手意識があったり、技能が定着していなかったりして、学習で身に付けたことを家庭で生かすことが難しい実態もあることがうかがえる。また、世の中には既製品があふれ安価に物が手に入ったり、エアコンに頼りがちな生活であったりするため、学習内容を自分の生活と関連付けて考える機会がないまま過ごしていたのではないかと考えられる。さらに、快適な衣服と住まいの内容について、学習内容を確実に身に付けさせることや、それらが生活とどう関わっているかを考えさせる授業が不十分だったのではないかも考えた。

そこで、本研究では、研究テーマ、研究課題を受け、快適な衣服と住まいの内容において、生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てるために、活用につながる基礎的・基本的な知識及び技能を習得させる指導の在り方を探っていく。生活の場面を取り上げながら基礎的・基本的な知識及び技能の習得を図り、自分にもできたという自信をもたせることで、日常生活の中で課題を解決する際に活用しようとする実践的な態度が育つであろうと考え、本目標を設定し、研究を進めることとした。

3 研究の仮説

家庭科における一連の問題解決的学習過程において、日常生活で使用する物を教材にして実習や観察、調査、実験などを取り入れ、学習内容を生活の場面と結び付ける学習活動及び振り返り活動を設定すれ

ば、より確実に知識及び技能が身に付き、日常生活の中で活用しようとする実践的な態度を育てることにつながるであろう。

4 研究方法

- (1) 先行研究や文献等を基にした情報収集や理論研究
- (2) 家庭科の学習に関するアンケートの作成，理論研究を基にした指導案，ワークシートの作成
- (3) 所属校での授業の検証及び考察

5 研究内容

- (1) 先行研究や文献を基に，活用につながる基礎的・基本的な知識及び技能を習得させる指導の在り方について理論研究を行う。
- (2) 家庭科の学習に関するアンケートを行い，その結果と理論研究を基に，仮説の有効性を検証する指導案，ワークシートを作成する。
- (3) 所属校の5年生における題材「わくわくミシン」(3時間)，「寒い季節を快適に」(3時間)による検証授業を行い，仮説を検証し，手立ての有効性を明らかにする。

6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

家庭科の学習指導要領では，基礎的・基本的な知識及び技能は，日常生活に関連のある学習場面において，児童自身が主体的に知識や技能を生かし，自分の考えを働かせながら工夫する経験を重ねる中で身に付いていくものであること，自分にもできたという自信をもつことで生活に生かそうとする意欲が高まり，身に付いていくものであることが述べられている。さらに，柴田は「活用することで，知識及び技能はより確実なものとなって身に付く」¹⁾と述べている。

これらの考えを踏まえ，本研究では，活用につながる基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるためには，学習と生活の場面を結び付ける手立てが必要であると考え，2つのことをポイントにして研究を行った。1つ目は，自分の生活を想起させることである。2つ目は，自分にもできたという自信をもたせることである。これらにより，生活に生かそうとする意欲が高まり，基礎的・基本的な知識及び技能を定着させる一助になるであろうと考えた。

- (2) 研究の構想

ア 生活の場面と結び付ける学習活動を取り入れた学習過程

佐賀県小学校教育研究会家庭部会より提案されている学習過程の中に，生活の場面と結び付ける学習活動を取り入れた学習過程モデルを考えた(図1)。基礎的・基本的な知識及び技能を習得する「さぐる」段階，知識及び技能を使って課題を探究的に解決する「ふかめる」段階，題材を通して学んだ成果を総合的に活用して表現する「いかす」段階である。

ここでは，「みつめる」「さぐる」段階で，日常生活で使用する物を教材にして実習等の体験活動を取り入れ，生活に生かす見直しをもたせる。さらに，「さぐる」段階の後半で，生活の場面と

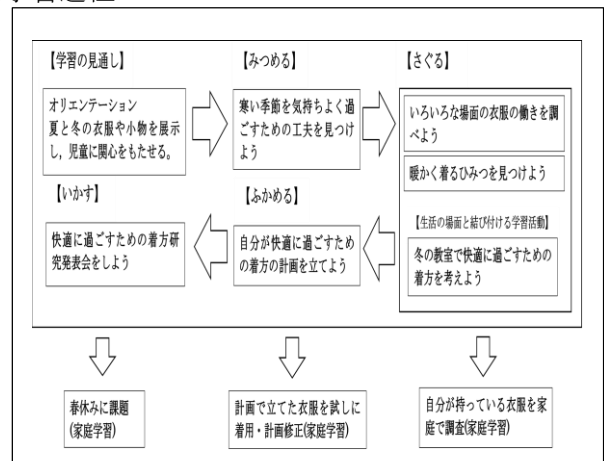


図1 生活の場面と結び付ける学習活動を取り入れた学習過程モデル

結び付ける学習活動を設定する。生活の場面と結び付ける学習活動とは、日常生活で起こりそうな場面
を課題として教師側から提示し、児童が今までに学んだことを活用して観察、実験などを行い、課題を
解決したり、よりよい方法を見付けたりする活動である。学んだことと自分の生活にどのような関わり
があるのかを児童に考えさせることで、学習内容を、より実感を伴って理解させることをねらいとして
いる。次の「ふかめる」段階で、習得した知識及び技能を活用して、探究的活動に取り組みさせる。最後
の「いかす」段階で、成果を表現する活動を設定する。そこで、学習前の自分を振り返らせ、自分の成
長を感じさせる。

このような一連の学習過程を仕組むことで、生活をよりよくしようとする実践的な態度の育成を図る。

イ 検証の視点と具体的な手立て

(ア) 【検証の視点Ⅰ】題材の導入段階において、日常生活で使用する物を提示することで、児童は生活
に生かす見通しをもてたか。

学習への興味・関心を高めるために、「寒い季節を快適に」の学習に入る前に、廊下に「触って調べ
てみようクイズ」を掲示する(図2)。そして、実際に衣服や小物に触れながらクイズの答えを考えら
れるようにするために、夏と冬の上着や小物を展示する(図3)。授業では、通常、教師の口頭での説
明が多いが、夏と冬の上着や小物などの具体物を見たり触ったりして、課題について調べ
させる。このような手
立てを取ることで、学
んだことを生活に生か
すことについての意欲
と見通しをもたせるこ
とができると考えた。

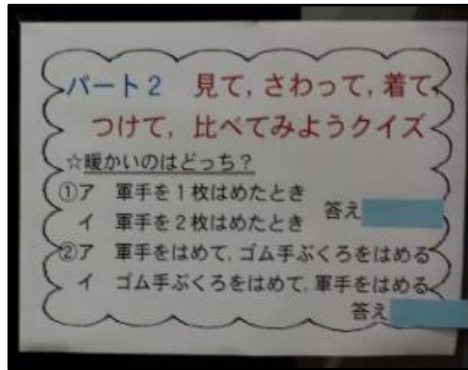


図2 触って調べてみようクイズ



図3 衣服や小物の展示

(イ) 【検証の視点Ⅱ】生活の場面と結び付ける学習活動を設定し、学んだことの活用を通して、知識及
び技能の定着が図られているか。

「さぐる」段階の後半で、生活の場面と結び
付ける学習活動に取り組みさせる。授業では、日
常生活で起こりそうな場面を課題(A)として
教師側から提示する(資料1)。課題は、今まで
に学習したことを活用して解決できるもので
あること、自分なりの根拠をもった解答ができ
るものであることの2点に留意する。また、課
題に、架空の人物(B)を登場させ、第三者的な
立場に立たせるようにする。そして、観察、実
験を行って分かったことを基に、他者へのアド
バイスをするという形式でまとめさせる。そう
することで、自分の考えを客観的に見つめさせ
、整理させる。授業の終末に、振り返りを書か
せ、次の授業やこれからの生活にどう生かして
いくのかを考えさせる。このような手立てをと
ることで、学んだことが活用され、より学習
の定着が図られると考えた。

ある日、晴田花子さんはおうちの人におつかいをたのまれました。近
所の雑貨屋さんで、
ウォールポケットを買ってくることです。 (A)

花子さんのおうちの人、

- ①ウォールポケットに机の上の手紙やはがきを全部入れられるよう
にしたいと思っています。
- ②そして、せっかくだから長く使い続けたいと思っています。
- ③ただ、ウォールポケットをかざれる場所の横ははが30 cmしか
ないそうです。

花子さんは、気に入ったウォールポケットを4つにしぼりましたが、
どれを買えばよいのか迷っています。値段はどれも同じです。

みなさんなら、どれを選びますか? 今までの学習をもとに、花子さん
にアドバイスをしてあげましょう。 (B)

資料1 生活の場面と結び付ける学習活動の課題

(ウ) 【検証の視点Ⅲ】振り返り活動を通して、日常生活への実践意欲を高めることができたか。

「いかす」段階で、今まで学習したことを基に実践した成果を発表会で紹介させる。成果とは、題
材によって異なるが、検証授業(11月)「わくわくミシン」では、家族のために作ったオリジナル作品、

検証授業(1月)「寒い季節を快適に」では、快適に過ごすための着方である。それぞれの発表会において、計画を立てさせた後、家庭実践に取り組み、家族からの感想・アドバイスを参考にさせる。授業では、作品や着方の最初と最後(場合によっては途中段階)を写真等で比較させる。さらに、最初と最後の感想も取り上げ、児童自身に意識の変化を自覚させる。このような手立てをとることで、自身の成長及び学びを、生活に生かそうとする意識の高まりが期待できると考えた。

(3) 検証授業の実際

ア 題材「寒い季節を快適に」(全5時間)の概要

本題材は、衣服の働きと着方についての学習である。衣服の働きとは、動きやすさだけでなく、皮膚を清潔に保ったり、けがから身

を守ったりすることも含まれる。衣服の着方とは、熱を逃がさないようにするために襟元や袖口を閉めたり、保温するために重ね着をしたりして、状況に応じて工夫して着ることである。指導計画を表1に示す。

この学習を通して、児童がこれまで無意識に選んで着ていた衣服を主体的に選び、衣服の組合せ方を考えて暖かく着ることができるようになること、また、学習したことを生活に生かそうとする態度を育てることがねらいである。

表1 「寒い季節を快適に」指導計画

過程	時	学習のめあて	主な学習の流れ
めみ るつ	1	寒い季節を気持ちよく過ごすための工夫を見つけよう	教科書の図の中から、暖かく過ごすための工夫を見付ける。
さ		いろいろな場面の衣服の働きを調べよう	5種類(私服・体操服・給食エプロン・パジャマ・レインコート)の衣服を使って調べ、衣服の働きをまとめる。
ぐ	2	暖かく着るひみつを見つけよう	夏と冬と衣服と小物を使って調べ、衣服の特徴をまとめる。
る	3	冬の教室で快適に過ごすための着方を考えよう	課題に適切な衣服の組合せを考え、重ね着の実験を行って確かめる。
ふか める	4	自分が快適に過ごすための着方の計画を立てよう	指定された条件の基、快適に過ごすための着方の計画を立てる。計画の修正・改善を行う。
	課 外	計画で立てた衣服をために着てみよう	家族から感想・アドバイスをもらう。計画の修正・改善を行う。
いか す	5	快適に過ごすための着方研究発表会をしよう	自分が提案する快適に過ごすための着方をファッションショー形式で紹介する。自分の着方についてクラスのみんなに説明したり、アドバイスをもらったりして交流する。

イ 児童の実態

暖かく過ごすために着方を考える学習は、今回が初めてである。児童のふだんの着方を見ると、ほとんどの児童が暖かい着方をしているように見える。しかし、事前アンケートの結果、自分で衣服を選択せずに家族が準備したものをそのまま着る児童が31%(9名)、暖かく着る工夫を何も考えずに着る児童が45%(13名)で、主体的な選択で衣服を着ていない実態が分かった。そのため、室内でも寒さを感じるなど、学校生活と衣服の着方が合っていない児童がいる。

ウ 研究の考察

検証に当たっては、第2時、第3時、第5時の実践を分析し考察を行う。第2時で検証の視点Ⅰについて、第3時で検証の視点Ⅱについて、第5時で検証の視点Ⅲについて見ていく。

(ア) 【検証の視点Ⅰ】題材の導入段階において、日常生活で使用する物を提示することで、児童は生活に生かす見通しをもてたか。

a 第2時の授業の概要

本時の目標は、冬の衣服の特徴に気付き、暖かい着方が分かることである。夏と冬と衣服や小物を触ったり、身に付けたりできるようにしておくことで、冬の衣服や小物の特徴を見付けさせるようにした(図4)。児童は、夏の衣服や小物と比較することで、冬の衣服や小物にいろいろな特徴があることに気付くことができた。児童の気付きは、衣服の色、形、厚さ、肌触り、織目の粗さに着目しているこ



図4 衣服を調べている様子

とを確認した(図5)。これらの気付きから、熱を吸収しやすいこと(吸熱性)、熱(暖めた空気)を逃がしにくいこと(保温性)、風(空気)を通しにくいこと(通気性)、この3つが暖かく着るための大切な観点であることを確認した。そして、児童は、教科書の図から、衣服を1枚で着るより複数枚で着る方が暖かいということに気付くことができた。

b 児童の変容

児童の着方に対する意識の変化や、学習内容の理解の程度を調べるためにアンケートを作成し、事前(1月中旬)と毎回の授業後と事後(2月上旬)に実施した。アンケートのそれぞれの項目に対して、「当てはまる」

「どちらかといえば当てはまる」、「どちらかといえば当てはまらない」、「当てはまらない」の4つで回答させた。

授業後の調査で、「冬の衣服の暖かい理由が分かったか」の項目に、「当てはまる」と回答した児童が93%(27名)、「どちらかといえば当てはまる」が7%(2名)と、全員が「分かった」と回答している。

このことから、実際に衣服や小物を触ったり身に付けてりして調べたことで、冬の衣服や小物の特徴を捉えやすくなり、冬の衣服の暖かい理由が分かったのではないかと考える。また、ワークシートの記述を分析したところ、今までの自分の着方を思い起こしてこれから取り入れたいことを書いた児童が48%(14名)、自分の着方にこれから取り入れたいことを書いた児童が42%(12名)、学習内容の分かったことを書いた児童が10%(3名)だった(図6)。これから取り入れたいことを書いている90%の児童が、見通しをもつことができているのではないかと考える。

また、「今までは首のところがあいている服ばかりだったので、これからは首のところまである服を着たいです」、「タートルを着たら、今までよりも暖かい服装ができそうと思いました」、「黒い服はあまり着ていなかったの、今からは黒い服を着たいです」などの言葉から、今までの自分の着方を思い起こしていることが分かる。さらに、これからの着方を暖かくするために取り入れたいことを考えていることも分かる。冬の衣服の暖かい理由が分かったことで、自分の着方に取り入れようとする意欲や見通しをもつことができたと考える。このように、日常生活で使用する物を提示することは、生活に生かす見通しをもたせることに効果的であったのではないかと考える。

学習において、どの手立てが役立ったか、児童の意識を調査したところ、表2のような結果になった。事前に、廊下に衣服や小物を展示したことは67%(18名)の児童が役立ったと回答している。ただ展示するだけでなく、衣服や小物に合わせて掲示物の言葉を変えたり、クイズのプリントを掲示したりしたことが、児童の興味・関心を高める要因になったのではないかと考える。また、図だけで調べるより、衣服や小物を使って調べる方が、分かりやすく感じていることもうかがえる。

	夏	冬
衣服	○首の部分が見えている ○明るい色が多い	○首の部分まである物もある フードがついている ○黒や茶色ばかり
	○薄い、軽い	○厚い
	○ザラザラ サラサラ	○フワフワ、モコモコ
	○ジャンパーは風を通さない	
小物	○風がよく通る (通気性がよい)	○あたたまりやすい (風が通らない)
	○数が少ない	○数が多い
	○帽子につばがある	○帽子につばがないのがある

図5 児童の気付き

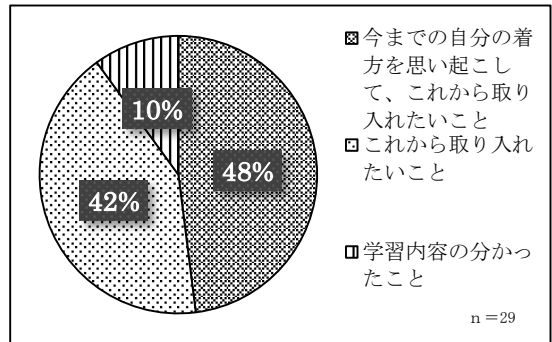


図6 これから取り入れたいことを書いている児童の割合

表2 役立ったと回答した児童の人数

手立て	(名)
①学習前から廊下に衣服や小物がある	18
②授業で夏と冬の衣服や小物を使って調べる	15
③重ね着の図を見る(教科書P54)	6
④重ね着の実験をする	19
⑤着方研究発表会をする	20

n = 29(複数回答)

(4) 【検証の視点Ⅱ】生活の場面と結び付ける学習活動を設定し、学んだことの活用を通して、知識及び技能の定着が図られているか。

a 第3時の授業の概要

本時の目標は、教室で快適に過ごすために、衣服を選択し、重ね着の順番を考えることである。教師が提示した課題を、実験を行いながら解決させるようにした(資料2)。各グループに実際の衣服を裁った布7枚とお湯が少し入ったペットボトル1本を用意し、人間に見立てたペットボトルに、選んだ布を重ね着の順番に巻き付けさせた。そして、開始直後、10分後、20分後、30分後に、ペットボトル内の空気の温度を測らせ、温度変化を調べさせた(図7)。教師用として、Tシャツ1枚分の布を巻き付けたペットボトルと、下着とトレーナーの布を巻き付けたペットボトルを用意し、自分たちのグループのペットボトルと温度を比較させた。どのグループが一番よい着方なのかを決めるのではなく、快適に過ごすための着方にはいろいろな組合せ(重ね着)があること、トレーナーなどを体に直接着ると肌触りがよくないことを確認した。屋外の場合は、一番外側に着る衣服を、風を通しにくい衣服にすることで暖かいこと、活動時は、脱ぎ着しやすい衣服を着ることで暑さ寒さを調節しやすいことも確認した。授業の終末に、三郎君へのアドバイスをするという形式でまとめさせ、自分の考えを表現させた。

冬のある寒い日、晴田三郎君は、うすめの長そでTシャツ1枚にダウンの上着を着て、学校に行こうとしました。すると、お母さんに「三郎！教室は寒いから着替えていきなさい。」と注意されました。

なぜなら、
 ①教室の気温は10℃以下です。
 ②教室では、上着を脱ぐことになっています。
 ③動きやすい服装がよいです。
 三郎君のたんすの中には、下着、トレーナー、タートルシャツ、フリースの上着、長そでTシャツ、シャツ、セーターがありますが、どれを着ればよいのか迷っています。みなさんなら、どれを選びますか？今までの学習をもとに、三郎君にアドバイスをしてあげましょう。

資料2 生活の場面と結び付ける学習活動の課題



図7 重ね着の実験の様子

b 児童の変容

授業後の調査では、生活の場面と結び付ける学習活動に取り組んだことで、「暖かい着方が分かったか」の項目に、「当てはまる」と回答した児童が59%(17名)、「どちらかといえば当てはまる」が31%(9名)と、90%(26名)の児童が「分かった」と回答した。また、「ふかめる」段階の着方研究発表会の計画内容を分析したところ、観点と要素を関連付けながら計画を立てることができた児童が83%(24名)だった(図8)。ここでは、観点とは、吸熱性、保温性、通気性の3つについてであり、要素とは、色・形・厚さなどの6つのことである。生活の場面と結び付けて考えさせることは、観点と要素を関連付けて理解させることに効果的に働いたのではないかと考える。さらに、計画で児童が重視した要素を詳しく調べたところ、形と重ね着を意識して衣服を着ようとしていることが分かる(図9)。これは、実験の際に、タートルシャツを重ね着したペットボトルの温度があまり下がっていないのを体験したことで、暖かいことを実感を伴って理解したためと考える。

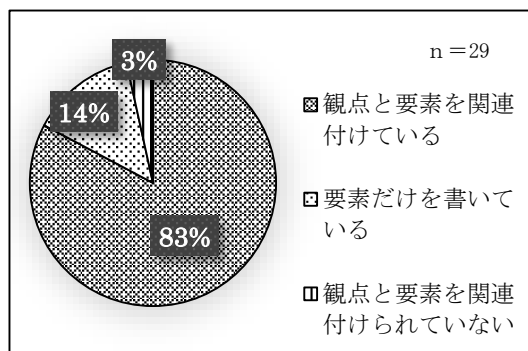


図8 暖かい着方を書いている児童の割合

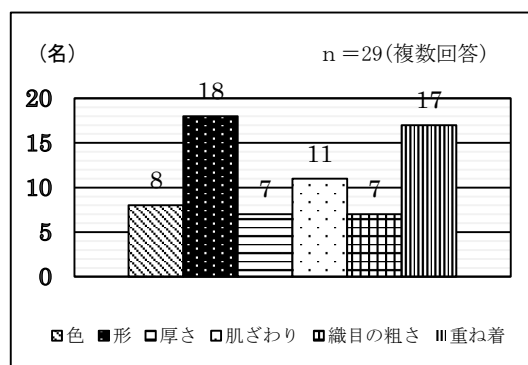


図9 計画で児童が重視した要素の状況

また、児童が学習したことを生かしてふだんの衣服を着るようになってきているかを調査したところ、

生活の場面と結び付ける学習活動に取り組む前は、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童が71%(20名)だったが、生活の場面と結び付ける学習活動後は、90%(26名)に増えた。このことから、児童がふだんの衣服を意識して着るようになってきていることがうかがえる。さらに、色・形・厚さ・肌触り・織目の粗さ・重ね着のどの要素を意識して着るようになったのかを調べると、**図10**のとおりであった。ほとんどの要素で意識の向上が見られるが、重ね着が顕著なのが分かる。重ね着の暖かさを実感を伴って理解したことで、意識して重ね着を取り入れようとしていることがうかがえる。また、第3時の授業で、三郎君へのアドバイスを考えたことが、自分の着方を考えるときに生かされつつあると考える(前頁資料2)。

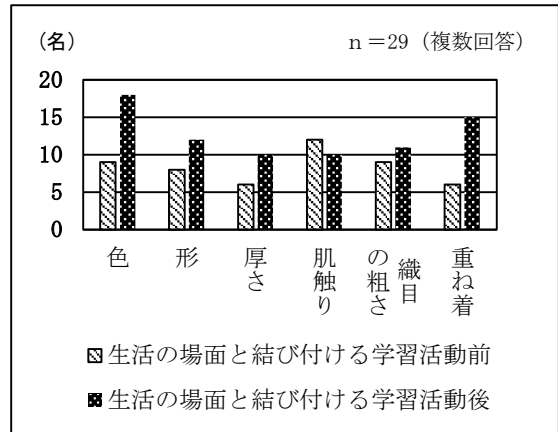


図10 ふだんの着方についての意識調査の結果

加えて、色についても増えていることが分かる。これは、児童は外で遊ぶことが多いため、吸熱性を考えて、黒っぽい色の服を着た方が有効だと考えたのではないかと考える。

このように、ふだんの衣服を意識して着るようになってきていることで、着方研究発表会では、学んだことを自分の着方に生かそうとしている児童が多かった。

特に、次に挙げる3名を考察する。この3名のふだんの様子を見ると、衣服に対して無頓着だと感じられるような場面がある。また、事前アンケートでは、この3名は寒いのは嫌いと思っているにも関わらず、暖かさを考えて衣服を選んで着ていないと回答した。K児とI児については、ふだんの着方では寒さを感じるため、自分の着方に満足していないと回答した。M児については、家族が衣服を準備するため自分の着方に満足していると回答したが、暖かい着方を自分で考えて衣服を選ぶことができないところは満足していないと回答した。まず、発表会でのK児とM児について、**表3**に示す。

表3 着方研究発表会での児童の様子

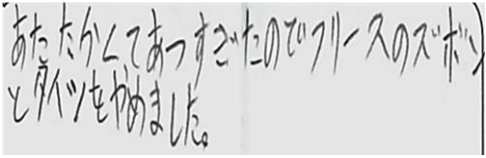
児童	発表会時の衣服と児童が述べた理由	感想・気付き
K児	衣服 ○下着と長袖のタートルシャツとトレーナーを重ね着した。	今日重ね着の時のみ外で着たのでうれしかったです。今までにはトレーナーはなかったけれど重ね着をすればあんなに暖かい感じがする。なので重ね着はいいと思います。
	理由 ○トレーナーは黒で、熱を吸収するので暖かい。そして、長袖のタートルシャツは首まであるので、風が入らない。	
M児	衣服 ○裏起毛素材で、伸び縮みする長ズボンを選んで履いた。	いつも服は、ママが選んでくれるので、自分で選べるような気がしたけれど、温かくなるように工夫をしていく事が分かりました。自分でもえらべようと思えました。
	理由 ○長ズボンの生地が柔らかくて伸び縮みするので動きやすいし、生地が厚いので暖かい。	

K児は、下着とトレーナーだけの日が多く、複数枚を重ねて着るという意識はなかった。しかし、発表会では、重ね着を取り入れた。このことから、実験で暖かい着方を理解したことで、取り入れてみようという気持ちに変化したのではないかと考える。発表会時の衣服と児童が述べた理由の「黒で熱を吸収する」、「首まであるので風が入らない」という言葉から、観点と要素を関連付けて考えることができているので、暖かい着方を理解していると判断できる。また、発表会で重ね着を取り入れたことで、本当に暖かいことや、衣服で暑さ寒さを調節できる便利さも実感でき、「重ね着はいい」という思いをもつことができた。事後アンケートでは、「考えて衣服を選択するようになったので、今では自分の着方に満足している」と回答し、暖かい着方ができるようになってきていることがうかがえた。

M児は、毎日、家族が準備した衣服をそのまま着用している。そのため、衣服を着る際に、暖かい着方について考えたことがなかった。しかし、発表会では、暖かい着方を初めて自分で考え、その衣服を着用することができた。着用した衣服を見ると、実験で厚い生地は暖かいことを理解したことで、取り入れたことがうかがえた。また、児童が述べた理由の「伸び縮みする」という言葉から、第1時の動きやすさについての学習も生かそうとしていることがうかがえる。さらに、実験結果とふだんの自分の着方を結び付けて考えたことで、M児は家族が暖かい着方を考えて衣服を準備してくれていることにも気付くことができた。事後アンケートでは、「勉強したことを取り入れて暖かくしているから、自分が考えた着方に満足している」と回答し、暖かく着るための衣服選びができるようになりつつあることがうかがえた。

次に、発表会までのI児について、表4に示す。

表4 着方研究発表会までの児童の様子

児童	計画の衣服と児童が述べた理由、発表会の衣服		感想・気付き
I児	計画の衣服	○スパッツとフリースのズボンを履く。	
	理由	○スパッツとズボンで空気の層ができるので暖かい。	
	発表会の衣服	○スパッツとフリースのズボンを止め、裏起毛素材の長ズボンに変更している。	

I児は、暖かい着方を考えて衣服を選んだことはなかったが、実験で重ね着は暖かいことが分かったので、発表会の計画に多く取り入れることにした。「スパッツの上にフリースの長ズボンを履く」、「手袋を2枚重ねる」などである。児童が述べた理由の「空気の層ができるので暖かい」という言葉から、観点と要素を関連付けて考えることができているのが分かる。しかし、計画した衣服を家庭学習で試しに着てみると、このままの着方では自分には暑過ぎると判断し、1枚でも暖かく履けるズボンに変更している。このことから、学習したことを基に自分に合った着方に変更できたことは、習得した知識を活用できているということだと考える。事後アンケートでは、「自分の着方に満足している」と回答し、暖かさを考えて着方を工夫できるようになってきていることがうかがえた。

このように、生活の場面と結び付ける学習活動を設定することにより、児童は実感を伴って理解することができた。理解したことで自分の衣生活に取り入れようとする意識の変容が見られ、その結果、暖かい着方ができるようになってきた。

(ウ) 【検証の視点Ⅲ】振り返り活動を通して、日常生活への実践意欲を高めることができたか。

a 第5時の授業の概要

本時の目標は、冬を快適に過ごすための着方を考え、整えようとすることである。本時までには、家族からのアドバイスや自分が着用して感じたことを基に、修正・改善を行わせた。

本時は、前時の計画で立てた着方を、グループ内でファッションショー形式で発表させた。その際に、発表用ワークシートといいねポイントカードを用意した。発表用ワークシートには、衣服の枚数、工夫したところとその理由を書かせ、児童の考えを表現させた。いいねポイントカードには、発表を見る視点を次頁資料3のとおり明示し、友だちの着方のよかったところを見付けやすいようにした。この視点は、前述の暖かい着方の要素を、児童の言葉で表したものである。グループでの発表後、それぞれのグループの代表者にもう一度発表させ、全体で快適に過ごすための着方について確認させた。その後、いいねポイントカードを交換させ、自分の着方で褒められたところやアドバイスをも

らったところを確認させた。授業の最後には、この学習に入る前に撮ったふだんの着方の写真や最初の頃の感想を見せて振り返らせた。

b 児童の変容

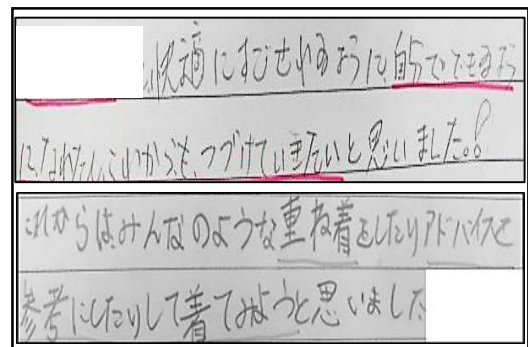
授業後の調査で、「着方の理由が分かって、快適に過ごすための着方ができるようになったか」の項目に、「当てはまる」と回答した児童が76% (22名)、「どちらかといえば当てはまる」が24% (7名)だった。全員の児童が「できるようになった」と自覚することができた。さらに、「これからは、快適に過ごすための着方ができそうか」の項目に、「当てはまる」と回答した児童が79% (23名)、「どちらかといえば当てはまる」が21% (6名)と、全員の児童が「できそうだ」と回答した。このことから、いいねポイントカードで着方を褒められたことで、他者から認められた経験が自信となったり、意欲を喚起したりしていることがうかがえる(資料4)。また、学習に入る前の着方の写真から、少しでも暖かい着方に変化してきていることを自覚したことで、自分にもできたという自信をもったのではないかと考える。

ワークシートの内容を分析したところ、いいねポイントカードで褒めてもらったところを続けていきたいと書いた児童が34% (10名)、褒められなかったところを改善したり、友だちの工夫を取り入れたりしたいと書いた児童が52% (15名)だった。アドバイスをもらった児童全員が、改善したいところを書くことができた。このことから、全員が自分の着方を振り返り、これからの着方をよりよくしていきたいと考えたことが分かる。さらに、いいねポイントカードを使って友だちの発表を見せるようにしたことで、暖かく着る要素を再確認させ、今後の参考にしたい着方を見付けさせることにつながったと考える。

学習したことを生活の場面でどのように生かそうとしているのかを、ワークシートの記述から分析すると、図11の結果になった。ワークシートの記述を資料5に示す。「3週間前は薄着でとても寒そう」、「3週間前とは違って」、「服の着方とか特に気にしていなかったけど」などの言葉から、今までの自分の着方と比べていることが分かる。自分の着方や意識の変容を自覚していることの表れだと考える。そして、比べたことで自分の成長を実感し、冬の着方をよりよくしていきたいという実践意欲が高まってきていると考える。さらに、「休みの日」、「夏の衣服」、「気温によって」、「春や秋などの季節」、「春の遠足」などの言葉から、冬の着方だけでなく、他の季節や気温、学校行事などについても考えていることが分かる。学習したことを他の場合の着方にも結び付け、着方を工夫しようと考



資料3 いいねポイントカード



資料4 児童の感想

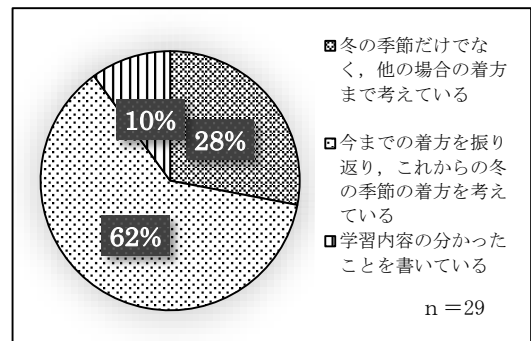


図11 これからの着方について書いている児童の割合

・3週間前は薄着でとても寒そうだったけど、この学習で3週間前とは違って、とても暖かい服装になった。家族に教えたい。これからもこの学習を生かしていきたい。
 ・この勉強をする前は、服の着方とか特に気にしていなかったけど、この勉強をして暖くなるポイントが分かって、気にするようになった。休みの日とかも服装に気を付けて過ごしたいし、来年の冬も快適に過ごせるようにしたい。
 ・夏の衣服にも気を付けようと思った。
 ・これからは、自分で衣服を考えて、気温によって、自分の力で調節できるようになりたい。そして、微妙な季節だから、春や秋などの季節にどう調節するかも考えたい。
 ・春の遠足のときなども工夫していきたいと思った。

資料5 第5時のワークシートの記述

え始めていることがうかがえる。また、「家族に教えたい」、「自分の力で」という言葉からも、児童の意識が日常生活へと広がり、学習して考えたことを表現しようとしていることが分かる。

授業後のアンケートでは、全員が暖かい着方ができるようになったと自覚し、できそうだと回答した。他者から認められることや、着方や意識の変容を自覚することで自信となり、学習したことを日常生活で実践しようとする意欲が高まったのではないかと考える。

しかし、授業後1週間程経ってからふだんの着方を調べると、7℃前後の室温で衣服を1～2枚しか着用していない児童もおり、暖かい着方ができているとは言い難い実態がある。一方で、表5のように、衣服が2枚の児童が3名減り、

表5 児童のふだんの着方

	枚数	着ているもの	事前	事後
①	4	下着 + タートルシャツ + トレーナー + パーカー	1	0
②	3	下着 + タートルシャツ + トレーナー	4	8
③	3	下着 + 長袖Tシャツ + トレーナー	14	15
④	3	下着 + 半袖Tシャツ + 長袖Tシャツ	1	0
⑤	2	下着 + トレーナー(長袖Tシャツ)	8	5
⑥	1	トレーナー, 長袖Tシャツ	1	1

n = 29

タートルシャツを着用している児童が3名増えるなど、ふだんの自分の着方を意識してよりよくしようとする児童も現れている。このことから、暖かい着方についての考えをもったことで、自分が持っている衣服の中で、着方を工夫しようとしていることが分かる。

7 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

今回の研究では、学習と生活の場面を結び付ける手立てを取り入れることが、活用につながる基礎的・基本的な知識及び技能の習得に効果的であることが見えてきた。また、習得した知識及び技能を活用させることで、より確実に習得させることができ、習得と活用を更に繰り返すことで、日常生活において転移性のある知識及び技能になるということを実感した。

本研究を通して、特に次の3つのことが挙げられる。

- ・ 自分の生活を想起する児童が増えたこと
- ・ 自分にもできたという自信をもって、友だちや家族に学習したことを伝える児童が増えたこと
- ・ 自分の力でよりよくする方法を考え、行動に移す児童が増えてきていること

本研究における手立てをどの内容でも取り入れることで、児童が学びを日常生活において生かそうとすることが増えていくことを期待したい。

(2) 今後の課題

- ・ 各内容における、生活の場面と結び付ける学習活動の課題づくり
- ・ 家庭科通信や宿題等を利用した、家族への啓発と協力依頼

《引用文献》

- 1) 加地 芳子・大塚 真理子編著 「家庭科授業づくりの工夫(柴田 陽子)」『初等家庭科教育法』2011年 ミネルヴァ書房 p.81

《参考文献》

- ・ 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 家庭編』 平成20年8月
- ・ 佐賀県小学校教育研究会家庭部会 「生活を工夫する実践力を育てる家庭科教育」『第49回全国小学校家庭科教育研究会研究紀要』 平成24年11月
- ・ 加地 芳子・大塚 真理子編著 『小学校家庭科概論』 2011年 ミネルヴァ書房